

ドイツ語音韻論の概要

田 中 宏 幸

1 ドイツ語の一般の発音、資料と方法について

1.1 ここで一般の発音というのは DUDEN のいう、いわゆる標準ないし基準発音 *Hochlautung* でなく、これに準ずる *gemäßigte Hochlautung* と（共通）口語発音 *Umgangslautung* とに跨るものを指している。DUDEN に従えば標準発音は「高貴な言葉を芸術的に発音しようとするすべての人々の理想的な発音である」。しかしこのような発音は日常一般に行われているわけではなく、放送などでも方向として目指されているかもしれないが、かなり柔らげられるのが普通である。まして日常の早い発音やくつろいだ会話では、標準発音の規定は緩和されざるを得ない。私は最も普通に行われ、しかもくずれない発音を普通という意味での標準とよびたい。しかしここでは混乱をさけるために、これを「一般の発音」としている。

DUDEN は標準発音の機能として、理想的な規範 *Norm* であること、地域性を越えて統一されていること、種々の異同も最少限にとどめられ、書体に近く明確であることなどを列挙している。しかし Polyphyllie [polyfʏ'li:] と Polyphylie [polyfy'li:] が区別して発音されるべきであるのは、教養人が普通両者を区別して発音するからではなくて、異った風にかかれているからとしている点に、その立場がうかがわれる。確かに書の影響は時には大きい、これでは DUDEN のいう誇大発音 *Überlautung* に近づいているといわなくてはならない。

1.2 さて、私は以下に、今みた意味の一般の発音を中心にその音韻構造の概要を記述しようと思う。もちろん標準発音や口語のくずれた発音、それに誇大発音も充分に参考になっている。この小論ではこのような発音の資料としてハンブルク在住の小学校教師某嬢の報告を中心にし、更に北ドイツ放送 NDR（ハンブルク、これにはケルンの西ドイツ放送も一部含まれている）や一般のドイツ人の発音を参考にしている。又補足的資料として DUDEN, v. ESSEN 1964, SIEBS, WÄNGLER などを援用している。

1.3 音韻論の研究方法はいろいろな意見があって諸学者で必ずしも一致していないが、ここでは TRUBETZKOY, PIKE などに従い特に後者により多く拠っている。又今日音響物理学の分析方法の著しい進歩によって音声学の分野でも新しい成果が収められつつあり、それらの結果がしばしば従来のものと類似していたり、その裏付となったりして興味深い。確かに同じ聴覚的特徴をもつ音が異った調音運動でも発音されるから、

このような客観的な分析による音響学的な音声の特徴は、ぜひとも考慮されなくてはならない。しかしここではこのような研究方法を断念している。そして19世紀中葉以降ずっと主流となってきた、調音運動を基準とする従来の方法に従う。このような方法は今日なお、実用・応用面ではいぜんとして有利であると思う。

2 音声学的にみたドイツ語の音

2.1 まず最も普通の母音として次のようなものが現われる。[a] acht, [ɛ] hell, [ɪ] in, [ɔ] offen, [u] und, [œ] Hölle, [ʏ] Hütte; [ɑ:] haben, [e:] heben, [i:] bieten, [o:] loben, [u:] Hut, [y:] fügen, [ø] hören [ar] Reis, [au] Haus, [ɔʏ] heute; [ə] habe, [ʊ] Uhr ['u:ə] .

これ以外に [e i o u ø y] が主として外来語や複合語で主要アクセントのない位置に現われるが、これらの狭い短母音が常に広いそれぞれの対に対して明確に区別されているとはいえない¹⁾、このような形式は音韻分析の少くとも最初には考慮しなくてもいい。

他に標準発音で ä, äh の綴字のために広い長母音 [ɛ:] が規定されている。Bär [bɛ:r] , Sälé [zɛ:lɛ] , (Beer [bɛ:r] , Seele [se:lɛ] を参照)。しかしこの音は少くとも北ドイツでは一般的なものではない。私の報告者でも多分に意識のないし人工的な発音でしか聞かれなかった。v. ESSEN, FORCHHAMMER, WÄNGLER などもこれを一般的な音とみていない。

又同じく標準発音が規定しているフランス語系外来語にみられる鼻母音もドイツ語本来の音でない。報告者でははなはだしく意識的な二三の発音で聞かれたが、多くは当該母音と [ŋ] や [m,n] などの結合で代置される。Bonbon [bon'bo:n, bon'bon] , Bronze [bo:ŋse, bro:nse] , (s)charmant [ʃarmant] elegant [ele'gant] , Karton [kar'toŋ, kar'to:n] , Orange [oraŋʒə, oranʒə] , Pension [pāsi'o:n, pāzi'o:n, penzi'o:n] etc.

英語などで普通の [æ] も一部方言などでみられるが²⁾、英語系外来語のこの音が大体 [ɛ] で代置されることからみても一般的な音でないことがわかる。同様 [ʌ, ɛɪ] などでも [a, u, e:] などで代えられる。時々引用される pfui, hui などの [ʊɪ] は例外的なものとしなくてはならない。Camping, Catchup, Jazz, Snackbar, Baby, Make-up, Bungalow, etc. 参照。

[ə] より広目の [ʊ] は DUDEN では口語発音の項に記載されているが、放送などでもごく一般的な音で、かなりはっきりした発音でも普通に聞かれる。

従って DUDEN の目録から [a: e i o u ø y ä ö œ ē ā: ō: œ: ē: ɛ:] を除く17母音に [a:], [ʊ] を加えたものが一般の発音のドイツ語に現われる、音声学的にみた母音とされる。これを音声図表にまとめると大体次のようになる。

調音位置 開き		前 舌		中 舌	奥 舌
		張 唇	円 唇	非円唇	円 唇
狭	狭	i	y		u
	開 狭	ɪ	ʏ		ʊ
中 開	半 狭	e	ø	ə	o
	半 広	ɛ	œ	ɐ	ɔ
広		a			ɑ

2.2 子音としては次のような音が一般の発音で現われる。

[p^h] Pein, [p] abfahren ['apfa:rən], [t^h] Teich, [t] entnehmen [ent'ne:mən]
[k^h] kein, [k] weggehen ['vɛkge:ən], [b] Bein, [d] dein, [g] Garten, [f] fein,
[s] reißen, [ʃ] Schein, [ç] ich, [x] Bach, [v] Wein, [z] sein, [j] jung, [pf]
Pfeil, [ts] Zahn, [tʃ] deutsch, [m] mein, [n] nein, [ŋ] lang, [l] Lippe, [r], [ʀ]
rot, [h] Haus, ['] aus ['aus] .

他に [ʒ], [dʒ] が主として外来語に現われる。[ʒ] は北ドイツの一部の方言（例えばブレーメン）などにある音なので南ドイツなどより普及している音である。しかし全体的にみれば [ʃ] で置き換えられることが多いので一般の音とはみなされない。Genie [ʒe'ni:] , Journal [ʃur'na:l] . しかし放送や報告者では有声度が弱いようであるが普通に聞かれた。外来音のなかで最も取入れられやすい音と推定される。Regie [re'ʒi:] , Jazzmusik ['dʒesmuzi:k] .

これ以外の子音は大体外来音にとどまっていて、外来語は同化される場合は他の本来のドイツ語音に代えられる。二三の例をあげると硬口蓋鼻音の n 音は [nj], [ɲ] は [lj] ³⁾, [hw, w] などは [v] で代えられる。Kognak ['kɔnjak], Bologna [bo'lonja], Whisky ['vɪski], Twist [tvɪst] etc.

いわゆる音節を形成する子音について DUDEN は口語発言の項で記載しているが、ここでいう一般の発音では普通の音とされる。これらはしかし標準発音や誇大発音では [əm, ən, əl, ər] や [em, en..., ɛm, ɛn...] とされる。

なお音韻分析の枠からははずれるが、北ドイツでは間投詞的な ja がしばしば吸気で発音されるのを観察した。参考のため報告しておく。

以上の音を音声図表にまとめる。

調 音 点 法		両 唇 音	歯 唇 音	歯 (茎) 音	歯 茎 口 蓋 音	硬 口 蓋 音	軟 口 蓋 音	口 蓋 垂 音	声 門 音
		破 裂 音	無 声 帶 氣 音	無 声 硬 音	有 声 軟 音				
破 裂 音	無 声 帶 氣 音	p ^h		t ^h			k ^h		,
	無 声 硬 音	p		t			k		
	有 声 軟 音	b		d			g		
摩 擦 音	無 有		f v	s z	ʃ ʒ	ç j	x		h
破 擦 音			pf	ts	tʃ				
鼻 音		m		n			ɲ		
流 音	震 側 音			r l				R	

(鼻音, 流音を楽音子音, 他を噪音子音とする。)

3 音 素 の 設 定

3.1.1 長短母音：先にみた19母音のうち〔ə〕と〔ɐ〕を除く短母音〔a ɛ ɪ ʊ œ ʏ〕はそれぞれ同一又は類似の音声環境で示差的に対立するから PIKE の手順の 1, 2 や TRUBETZKOY の基準 2 などに従ってそれぞれ単独の音素とみなされる。

dann/denn, deck/dick, dich/doch, Most/mußt, mußte/müßte, helle/Hölle, missen/müssen, konnte/könnte etc.

これらと音声上類似の長母音〔a: e: i: o: u: ø: y:〕はそれぞれ以上の短母音と同一又は類似の音声環境で示差的に対立する。従ってこれら 長母音もそれぞれ単独の音素と評価される。

Bann/Bahn, ebben/eben, in/ihn, offen/Ofen, Busse/Buße, Höllen/höhlen, Hütten/hüten etc.

ここで長短母音の各対を比較してみると、それぞれ音質（開きの大小、音色の明暗など）と量（長短）が組合わされて対立していることが認められる。これらのいずれが音韻論的に重要なのか、或いは組合わせも重要なのか簡単にはきめられない。ところで a 音の場合は〔a〕と〔ɑ〕がはっきり区別されなかったり（例えば DUDEN, SIEBS はこの区別を規定していない）方言によっては〔a:〕,〔ɑ〕と発音されたりするらしい。FORCHHAMMER は長短しか区別しない方言に言及している。又 V. ESSEN 1962によれば一般のドイツ人は量を示差的な特徴と感じているという。彼は更に中高ドイツ語で長音

記号を用いたことを、こうした意識と関連させている。これらから量的差異を第一次的な対立特徴とみなすことができる。とすれば音質の差異はこれに附属するものとされよう。⁴⁾

この結果として長短母音の各対は同一の音質の音素の現われで、音韻論的にはただ量の対立があるということになる。従って延長記号 /: / は異音として単に長いばかりでなく、同時にやや狭いか音色の暗い母音が現われることを意味する。MOULTON にならって /: / は短母音を延長し遠心化 *decentralize* (つまり調音位置が前上、後上へ移ることを指すが) すると記述できよう。

短母音 /a e i o u ö ü/ (*kurz*)

長母音 /a: e: i: o: u: ö: ü:/ (*lang*)

3.1.2 二重母音はドイツ語では TRUBETZKOY, PIKE に従えば長母音とともに単一なものと解釈される。TRUBETZKOYは基準5において Ei-er, blau-e, mißtrau-isch のように二音節に分割されないから、これらの二重母音は単音素的価値をもつとしているが、むしろ規準8の「当該言語において音素結合が許されないような位置に現われる場合」という全体からみた規則性が重要であろう。即ちドイツ語では外来語や擬声音語を除けば母音の結合は [ai au oy] の三つに限られ、これらはいずれも長母音が現われるとほぼ同じ音声環境で現われるし、語末などを除くなら短母音とほぼ同じ音声環境でも現われる。このような点で単一音素と解釈される。なおこれらの複音素的解釈については注で概要を紹介検討する。⁵⁾

なお TRUBETZKOY は母音音素の長いものに恒常的 *stabil* な開きをもつものとそうでない移動的な開きをもつものに分類しているが、前者は長母音、後者は二重母音をさしている。単一なものと解釈するなら、これら二重母音の記号は単一のものが望ましいが、混同の恐れはないから二記号で表わしてもよからう。ai, au, oy となるが先の短母音に平行させて ai, au, ou として差支えない。更に ü を i の o による円唇化と解釈して /ai au oi/ とする。PIKE は /aⁱ a^u oⁱ/ のような標記を暗示しているが、誤解の恐れさえなければ前者でいい。

man/mein, kann/kein, rann/rein, satt/seit/Saat, Bann/Bein/Bahn, Mann/Mai, Schuh/Scheu, sah/sei etc.

3.1.3 [ə] は音声学的には非円唇の中開中舌母音とみられるが性格のはつきりしない母音である。この [ə] は [ɐ] と類似しているが、両者は同一ないし類似の音声環境で対立するし [ɐ] は [ə] の後にも続くから同一音素の異音ではない。(bitte [brɪtə], bitter [brɪtər, brɪtəʁ, brɪtɐ])。この [ɐ] は以上の例でもわかるように子音 /r/ の異音として評価される。

この [ə] はアクセントのない位置にしか現われず、従つて形態素 be-, ge-, -chen, -sel などを除いて一音節の形式には普通現われない。正書法で e とされることが、アク

セントのない位置の〔ɛ〕や〔e〕（複合語、外来語などの）と一見自由変異のような関係にあるので、母音/e/の異音とも見られないこともない。しかし〔ə〕は単に〔ɛ〕,〔e〕の代りばかりでなく他の（アクセントがない）母音の代りにも現われることがある。DUDEN は politisch における〔pə'li:tɪʃ〕のような発音異同についてふれている。更に重要なのは MOULTON が指摘するように、この音の独特の分布である。即ち短母音は原則として語末に現われないのに、この〔ə〕のみ例外としてここに現われる。彼は更に Namen/Amen〔nɑ:mən/ɑ:men (ɑ:men)〕のような対立例を援用している。ドイツ語のいわゆる一般の発音では、このような対立ははなはだ疑わしいが、一応注目しなくてはならない。

又〔ə〕が特に音声学的にみて〔ɛ, (e), e:]などとだけ類似した疑わしい音の対をなすとは限らないことも注目されよう。以上からここで/e/を認める。従って〔ɛ〕,〔e〕などの〔ə〕との交替は音素の代置とみるべきである。

3.1.4 〔ɛ:]を絶えず〔e:]に対して示差的に発音する方言や個人のためには/ä/が認められることになるが、この場合は短母音の/e/も恐らく/ä/とする方が実状に合っていると思われる。

3.2 子音音素の設定：一般の発音に現われる28子音は、それぞれ単一の音素に評価されるわけではない。一般に音声学的に類似した音はしばしばある一つの音素の異音として評価される。PIKE に従ってこのような疑わしい音の対を見出して、疑わしくないものとに分けると便利である。このような対は音声学的資料からみると次のようなものである。

〔p^h〕〔p〕,〔t^h〕〔t〕,〔k^h〕〔k〕,〔ç〕〔x〕,〔s〕〔ʃ〕,〔n〕〔ɳ〕,〔r〕〔ʀ〕,〔h〕〔ʰ〕。

従って問題のない音は一応〔b d g f v z j m l〕であるが、このうち〔j〕は母音iと音声的に類似した疑わしい対となる。ここで次の8子音音素が認められる。/b d g f v z m l/. 又3破擦音〔pf, ts, tʃ〕はそれぞれ単一か複合かが疑わしいので検討を要する。

3.2.1 〔p^h〕〔p〕：〔p^h〕は両唇無声帯気破裂音で〔p〕は帯気という点を除けば音声学的には同じ音である。〔p^h〕は一般に非常にルーズな発音を除いて、アクセントのある母音の前で、ほとんど例外なく現われ、ここでは普通〔p〕は現われない。その他の音声環境ではこの両音は発話のスタイルなどで自由に交替して現われる。一般に早い発話やくずれた発音ほど〔p^h〕は現われない。一般の発音では語中、語間をとわず子音の前では〔p^h〕ではなく〔p〕が現われる傾向にある。いずれにしても両音は音韻論的に対立することはない。この両音の分布を表にすると大体次のようになる。これを要約すれば〔p^h〕と〔p〕は、相補的分布と、自由変異が組合わされた異音で共通の音素/p/を認めることができる。

	アクセントのある母音の前	s/ʃの前	p/b/fの前	ʃの後	子音の前
口語発音	p ^h	p	p	p	p
標準発音	p ^h	p	p	p ^h	p ^h
誇大発音	p ^h	p	p ^h	p ^h	p ^h

なお [p^h] は音声学的に明らかに複合であり、後に見るように /h/ が設定されるので、この帯気子音が */ph/ と評価されないことに注目しなくてはなるまい。それは語頭にたちうる子音のなかで p (及び t, k) を除いた他の子音は h を伴うことはないのに、p (t, k) はアクセントのある母音 (特に語頭では) の前ではほとんど専ら [p^h] などの帯気子音としてしか現われない。もしこれを */ph/ などと解釈すると /p/ などは語頭で単独に分布しない子音ということになり、他の子音との体系的な調和もとれない。

PIKE が英語の [p^h] について行っている解釈は大体以上のようなものであるが、ここでも適用される。

以上の評価は他の二つの無声破裂音の対にも平行する。

ここで /p t k/ が設定される。

3.2.2 [ç] [x] : 両者はともに無声の口蓋舌面摩擦音であるが [ç] は硬口蓋と前舌面, [x] は軟口蓋と奥舌面で調音される点が異なる。両音の分布を調べてみると次のようになる。

	前舌母音, ai, oi, 子母 /n, l, r/の後	後舌母音, auの後	語頭, /+/-/の後
[ç]	+	-	+
[x]	-	+	-

つまり典型的な相補的分布を示す。両音は音素 /x/ の条件異音である。

3.2.3 [ŋ] [ɣ] : 両音は鼻音という点で共通しているが 調音位置が異なっている。前者は歯茎, 後者は軟口蓋である。この両者は一般の発音や標準発音では同一又は類似の音声環境で示差的に対立するので、別の音素としなくてはならない。singen [zɪŋən]/sinnen [zɪnən], bang [baŋ] /Bann [ban] . /n ɣ/ が評価される。

但し WÄNGLER が報告するように ng の綴りが、絶えず [ɣg] か [ɣk] (語末などで) と発音されるような方言や個人では、いいかえれば [ɣ] が単独には現われず [k] [g] などの前でしか現われない場合は [ɣ] は [n] と相補的に分布し、かつ音声的にも類似しているから音素 /n/ の条件異音とされなくてはならない。SEILER もこのような方言を分析して、/ɣ/ を [n] の異音としている。⁶⁾

しかし報告者や一般の発音ではこのような分析はできない。例えば bang/Bank ははっきり区別される。ただ音節主音としての [ɣ] は音素連続 /ən/ の先立つ口蓋音による同化によって生じた一種の異音とも解釈されうる。

3.2.4 [s] [ʃ] : 調音点や方法などで両音は異なるが、鋭い音色と無声摩擦歯音とい

う点では少くとも共通している。しかし両音は音声の類似にもかかわらず語中や語末では対立するので、それぞれ別の音素に評価される。heißen [harsən] /heischen [harʃən], Bus [bus] /Busch [buʃ] . これは /s ʃ/ とされる。

3.2.5 [r] [ʀ] : [r] は歯茎舌端震音, [ʀ] は口蓋垂震音であるが, 調音点でいえばかなり離れているので PIKE のいわゆる音声的に類似した音の対のなかには数えられていないが, 少くともドイツ語では震音という共通点があり聴覚的にも非常に類似しててしばしば区別がつかない (なお 6.2.5 参照)。実際この両音は自由に代替することができ, その場合音韻論的対立はみられない。代表的な自由変異音で両者は音素 /r/ に評価される。

3.2.6 [h] [ʰ] : [h] は声門摩擦音, [ʰ] は破裂を伴う声門音で, 調音点は共通であるが先にみたような意味での類似音の対とはならない。それに 両音は示差的に対立するから, 本来別の音素とされなくてはならない。Haus [haus]/aus [ʰaus]. しかし両者は相互に排他的で [h] が現われれば [ʰ] が現われず, 又その逆でもあるのでいずれかを記せば他は零記号でもたたりる。それは 語頭ないし形態素初頭の母音の前では必ずこのいずれかが現われることになっているからである。但しこの位置が音素上の休止であるスペースや後にみる (7.3)/+/ などて明示されることが必要である。今この [ʰ] を仮に零記号としたが, これは更に 母音のこの位置での異音的附属特徴と解釈すべきものである。即ち /ə/ を除くすべての母音が初頭に現われるが, これらには原則的に [ʰ] が伴われる。例えば /a/ はこの位置では [ʰa] として普通実現される。[ʰa] と [a] はこの場合, 大体相補的に分布し自由変異が加わる /a/ の異音とされる。

3.2.7.1 [pf] : この音は普通歯唇無声破裂音とされるが最初の部分が [p] で調音されることも充分あるので [p] + [f] の可能性もある。それに次のような例では [f] や [p] が単独に他の音素と対立するから */pf/ とされなくてはならないともいえる。(MORCINIC 参照)。

Pfahle [pfa:le] / prahle [pra:lə], klopfe [klɔpfə] / Klospe [klɔspə], hüpfen [hʏpfə] / hübsche [hʏpʃə], Topf [tɔpf] / Torf [tɔrf] .

しかし他の子音結合などと比較してみると, PIKE 手順 3, TRUBETZKOY 基準 8 などによって, やはり単一と解すべきである。

pfl- : pl-, bl-, fl-, šl-, kl-, gl-

pfr : pr-, br-, fr-, tr-, dr-, šr-, kr-, gr-, (vr-).

即ち初頭では /l r/ の前には普通単一の子音しかたない。例外は št-, šp- であるが, 調音上の相違があってもただちに平行例とはできない。語末では一般に初頭の子音結合と逆順の結合が現われるのが普通なのに [pf-] では [*-fp] がないということも注目されよう。これに対し šp-, št- には -pš, -tš がある。もっとも -št や特殊な例であるが pš- もないわけではない。又 5 子音結合はまれなのに [-mpfst] は比較的頻度の高い結合で

あるなどから [pf] は単一と解釈できる。/p̃/ とする。

3.2.7.2 [ts] は歯茎無声破擦音であるが [pf] と同様やはり体系的にみて単一とされる。即ち tsv:-kv-,šv-,tskst (du metzgst) などから /c/ を認める。

しかしこの音には問題がある。それは形態素の結合間に生ずる nachts,Rats などの [ts] を同様 /c/ と認め、又 Gans の [gants] でも同じ /c/ を認めるか、それともここでは音素の結合とみて /ts/ とするかということである。後者のような現象は falsch [falʃ/faltʃ], manschen/mantschen, als [als/alts] などでも起るので、歯茎音の [l] や [n] の後に同じ調音器官の摩擦音 [s] や [ʃ] が続くとき間に破裂音 [t] が入るというように説明される。この代りにこのような位置の /s/ は /c/ によって代置されるとも解される。ここでは前者をとり同じ音声的な音を、一方で /c/, 他方で /ts/ と解釈する。或程度、形態論的な枠を考慮して一種の音素の重複を認める。

3.2.7.3 [tʃ] は外来語などを除いて普通語頭にたたない。例えば外来語の同化 Scheck や擬声音語 tschilpen/schilpen などでこのことを裏付けしている。又この逆順の [ʃt-] は語頭音結合としては極めて普通で、又語中、語末になら [-tʃ] はよく現われる。一方この破擦音は語頭に現われても他の子音と結合することはないし、其の他の場合でも mantschen (別形 manschen) などを除くとこの前に流音や鼻音は現われない。-mpfs, -mpft,-nts,-lts,-ntst,-ltst などと平行した結合がみられない。以上から [tʃ] は /tʃ/ と評価されよう。

3.2.8 [j] : この音は硬口蓋有声摩擦音として分類されるが、母音 i と音声的に類似していると考えていい。従ってこれを i の異音とする見方は TRUBETZKOY, v.ESSSEN, MOULTON などにみられる。TRUBETZKOY に従えば「ドイツ文語では i は母音の前には現われず j が専ら母音の前に現われる。それ故にここでは i と j は二つの異なった音素でなく、一つの音素の結合変種にすぎない」と解釈される。v.ESSSEN 1962 は更にこれに j が i の前にはたたないことを加えて祖述している。外来語 Jiddisch はもちろん例外として分析の枠からはずされる。⁷⁾ 又 DIETH もこの解釈には音韻論的には何ら反対すべきものはない。ただ何故に v が異ったように取扱われるのか分らないとしている。確かに v と u は音声的には似た音であるが、v は u の前でもたちうる点では j と異なる。Wunsch /vunʃ/. MARTINET は更にこのような子音と母音に跨るような音素を考慮して、音素を母音と子音のように分類することに消極的である。

他方 MOULTON, FORCHHAMMER は二重母音の副音にも [j] を記述している。即ち MOULTON は非音節母音 *nonsyllabic vowel* として [j] は短母音の後と、長短母音の前で現われるとしている。[bajn,nɔjn,ja:] . FORCHHAMMER は前者を非常に広く形成され噪音を伴わない末尾の j ([j] , [j̥]) とし、後者を噪音を伴う初頭の j ([j̥] , [j̥̥]) としている。MOULTON はしかしこれらの [j] が母音 [i] と相補的に分布するので /i/ の異音とする。なお au の副音には [w] を記述しているが、同様 /u/ の異

音と評価されている。結果としては TRUBETZKOY と一致している。彼らに従うと ja /ia:/, jung /iuʊ/ としなくてはならない。二重母音については TRUBETZKOY は単一なものと解釈するので全体は一個の母音とされる。彼はその場合音素記号を用いず ei, au, eu などの正書法の綴りを用いている。私はこの点では同様に、二重母音については [j] をみていない。

しかしここで問題となっている [j], つまり [j̥], [j̥] 又は母音の前の [j] については、むしろ一般的音節構造の型からみて /i/ の異音としない方がいい。即ち広義に解釈すれば, ['] も含めて大体, ドイツ語の音節は頭音, 主音, (末音) からなっている。['] を除くと音韻論的には頭音がない音節型も考えられるが, 二重母音以外に本来のドイツ語では母音結合はないから [j] は母音音素としないで単独の子音音素と解釈するのがいい。しかし, BRANDENSTEIN, DIETH が /j/ を認めるのは, このような解釈によるのか, 摩擦音と母音という音声的相違に注目しているのかは明確でないが, どうも後者のように思われる。

baʊ, laʊ, zaʊ, juʊ; fa:r, ga:r, va:r, ja:r; la:gən, ma:gən, za:gən, ja:gən etc.

3.2.9 音節を形成する流音, 鼻音は [əm, ən, əl, ər] などと自由変異関係にあり /ə/ もそれぞれの子音も別に音素として設定されているので TRUBETZKOY 基準11や PIKE 手順4などに従って複音素的に /əm, ən, əl, ər/ などと解される。[ʊ] は /ən/ の口蓋子音への同化によって現われる異音である。しかしこれは音韻論的に音素の代置とみることもできる。これは両唇音による同化 [m] の場合にも同様である。

sinken /ziŋkən/ [ziŋkən, ziŋkn̩, ziŋkʊ], he:bən / [he:bən, he:bn̩, he:bm̩].

3.2.10 以上で21子音音素が設定されるが, これに加えて [ʒ] を絶えず発音する個人や方言では音素 /z̃/ をもつことになる。

4 音素の示差的特徴

4.1 3でみた各音素は, それぞれ他から示差的な特徴によって対立するが, 一般にこれ以外にも附属して対比を強めている特徴も加わる。しかし最も重要なのは前者である。母音は3.1でみたようにまず長短母音は量によって対立している。この場合 /a, a:/ 以外では短母音ではやや広く, 長母音ではやや狭く実現されるが, これは附属的特徴とされる。各母音はそれぞれ調音の位置と開きに, 円唇相関が組合わされて対立している。前舌母音のみ張唇(又は非円唇) /i e/ と円唇 /ü ö/ と対立しているが, 後舌母音は円唇のみで直接このような対立はないように思われる。しかし /ü ö/ では円唇と同時に調音位置も少し後退するなどから考えて, これらはむしろ組合わされて, 大体次のような図式で示される体系をなしていると思われる。これを *dreistufig-dreiklassig*, (TRUBETZKOY) -*dreiarmig* (BRANDENSTEIN) とか 3 + 3 + 1 (HOCKETT) 体系などと称することがで

きよう。長母音は以上の体系と全く平行して、それぞれの短母音に対立している。二重母音はこの体系と別に線状に対立する。このいずれにもかかわりあわないのは /ə/ であって、この母音はすべての母音と一元的に対立することはない。不定ないし中立母音とされる。

i	ü	u		i:	ü:	u:
e	ö	o	ə	e:	ö:	o:
a	ai	au	oi	a:		

ところで TRUBETZKOY はドイツ語の母音の長短の対立を量的なものでなく音節中断の対立 *Silbenschnittgegensatz* によるものと解釈する。即ちこれがある場合は母音の流れが中断されて短くなり、これがないと中断が起らないので長くなるという。従ってこの場合は長母音の方がむしろ基本となり、特徴を欠く *merkmallos* 対立項となって短母音と欠如的 *privativ* な対立をなすといえる。語末ではこの特徴が現われることはないから長母音しかたないことになる。つまりここでは長短母音音素の対立は中和ないし停止される。ある音声環境で中和される二つの音素はいわゆる上位音素 *Archiphonem* にまとめられるから、これを進めるとドイツ語の母音には /A E I O U Ö Ü/ などの7つの上位音素がたてられることなるう。

これに反し二重母音と中立母音はこの相関対立にはかわらない。TRUBETZKOY は *lebendig*, *Holunder*, *vielleicht*, *wieviel* などでは [e o i] は音節中断がない本来なら長い母音であるが、アクセントがないので短かく現われ、これによって量が重要でないことが解ると説いている。

この学説を継ぐのは BRANDENSTEIN である。彼はドイツ語の母音の長短の比は大体 1.5 : 1 でa音では特に 1.75 : 1 という実験音声学のデータを示した後に、更に音節中断の有無が組合わされているとしている。v.EsSEN 1962 も子音へのゆるい結合と固い結合を実験的に確かめたとしているが、長短母音対立の示差的特徴としての唯一の可能性を証明しているわけではない。

私はこの対立はやはり量で説明すべきものと考え。この場合短母音が基本となって欠如的対立を示すことになる。語末については分布として短母音音素が現われないことを記述すればいい。*lebendig* などの [e] は本来 [ɛ] であるがアクセントがないので [e] になったとも解釈できる。しかしこのような [e] は又、[ɛ] として現われる傾向もあるから、やはり短母音とする方が実状にそっている。

4.2 子音音素の大半は調音方法（破裂音、摩擦音、破擦音、鼻音、流音）や調音位置・器官（両唇、歯唇、歯茎、軟口蓋、硬口蓋、口蓋垂、声門）で対立し更に有声・無声や硬軟調音などの対立が加わる。

4.2.1 /p t k/はそれぞれ唇、歯茎、軟口蓋という調音位置などで対立しているが、この各音素に同位置（ないし器官）の /b d g/ が対立する。調音方法はともに破裂音である

から有声・無声ないし軟硬調音がここでの示差的特徴となっている。このいずれかはしかながらきめがたい。即ち DUDEN では /b d g/ は完全有声 *vollstimmhaft* と規定されているが、これは理想にすぎず、ドイツ語の有声破裂音の有声度が低いことは諸家が一致して指摘している。WÄNGLER は南ドイツ方言では母音間でさえも、しばしばこれらの音が無声であると報じている。もち論この例は一方の極端であるが、一般的にみても南ドイツ方言の話手では語頭の b d g の無声化の傾向が強い。周知のようにこの有声破裂音は語末には現われない。ここに現われる /p t k/ の或るものを形態論と関連させて /b d g/ の音素の異音とする研究者もあるが、これらは [p^h t^h k^h] として実現されることもあり（標準発音はそうのように規定している）音素としては /p t k/ と解する方がいい。但し正書法の -b が -p と絶えず何らかの対立ないし対比を示し、いつも区別して発音される方言や個人ではそのような分析は可能であろう。私の報告者や一般の発音ではそのようなことはない。しかし [l] などの前では [b̥] と [p] ともきめ難いような音が現われる。neblig ['ne:blɪç, 'ne:blɪç, 'ne:plɪç] lieblich ['li:plɪç, 'li:blɪç] などが報告者でしかれたが、DUDEN によれば後者は ['li:p^hlɪç] とすべきである。ここでは前者は /b/, 後者は /p/ と解釈するが、それは /+ / の存在を考慮している。もち論絶えず [p] 又は [b̥] が区別なくここで発音されれば対立はいわば中和されることになる。WÄNGLER の ['knɔsbə, ʃbi:lən] のような引用例でもわかるように、[s, ʃ] の後の位置でもこのような対立が弱い全くなくなる。これら中間的な音はしかし、どちらにでも評価されたとすれば正書法などに従って便利な方をとることができる。

この両群の破裂音の対立が最も明確なのはアクセントのある母音の前の語頭と、多分母音間であろう。しかしこの後者の場合では先立つ母音の量が十分に影響する。一般有声音の前では長母音と二重母音がたち、無声音の前では短母音がたつ。この対立の示差的特徴は無声化した場合にも軟調音にとどまるという点を考慮して硬軟調音を第一次的のものとしたいが、摩擦音などの場合を考えると有声・無声の対立も平行して重要であるので、結局両者の組合わせと解するのが一番妥当である。

4.2.2 摩擦音では両唇音はないので /p b f v/ などを唇音として他に対立するものとしてもいいが、/f v/ を歯唇音とする。他に歯茎音 /s/ と歯茎（硬）口蓋音ともされる /ʃ/ それに口蓋音 /x/ がある。この /x/ は異音として硬軟両口蓋音 [ç], [x] をもつからただ単に口蓋音としなくてはならない。これらに /v z j/ が有声をもって対立する。/ʃ/ にはこのような対が本来のドイツ語音素としてはない。最後の /j/ は /x/ と一部しか重ならないが口蓋有声音としてほぼ平行したものと解される。BRANDENSTEIN も /j/ と /x/ は一元的に対立していると解釈する。

/s/ は /z/ とこのような一元欠如の対立をなすが、更に /ʃ/ と一元的に対立する。BRANDENSTEIN は共通の比較の基盤として歯間噪音子音 *Zisch-, Anblaselaut* であることを指摘している。しかし両音素を区別する示差的特徴は簡単にきめられない。FORCH-

HAMMER によると [ʃ] 音では呼気の流れが尖っていて薄く、空腔も小さいが [ʒ] では呼気の流れが広く豊かで空腔も大きい。従って両音は調音器官による区分はできないので特別な方法が必要だとしている。ここで前者を鋭どく、尖った *scharf*, *spitz* 後者を豊かで、広い *voll*, *breit* 歯間摩擦音と定義している。

私はさきに [ʃ] を歯茎口蓋音として分類したが、これは PIKE や DUDEN などの主なる調音点を基準にした分類に従っている。[s] は同様歯（茎）音とされている。又 v. ESSEN 1962 で [s] は歯茎前舌面の調音が主なる特徴とされている。他方 [ʃ] は歯茎と舌尖 *alveolar-koronal* で調音されるものとなっている。従って調音点歯茎 *alveolar* は共通するから両音は無声歯茎摩擦音としてまとめられる。しかし両音の示差的特徴は前舌面と舌尖という調音器官の相違でのみ説明できるかどうか、もっと詳しく調音運動を比較してみなければならない。

両音ともまず前歯が近づけられ口蓋帆が上げられる。しかし [ʃ] では「舌の前端が上歯茎に向って持ち上り、舌尖と歯茎の間に狭いすき間が残し、そのすぐ後部には舌面の前部が落込んでくぼみが出来る。その場合注意深い調音では唇が突出され円められる。歯茎と舌尖間のすき間を通過し、歯に向って唇と歯の間の小腔を通して流れる呼気が騒音を発生する。」他方 [s] では「下歯の内側に向って舌尖がよりかかり、舌面の前部が硬口蓋前部に向ってそり上り溝が中央に形成される。舌尖のすぐ後では平鍋のような小さなくぼみができる。呼気は舌面と口蓋の間に生じた溝を通して線条のように歯の端に向けられる。」以上が v. ESSEN 1962 の説明である。両音は結局呼気が歯に向っていわば吹きつけられる点では共通しているが、その呼気の流れ方、ないし形に相異があると推定される。その相違は恐らく通過する空腔に原因するであろう。舌尖と歯茎（及び舌面と硬口蓋前部）で形成された空腔から吹きつけられる呼気は [ʃ] を、前舌面と硬口蓋前部で形成された細い空腔を通る呼気は [s] を生ずると思われる。ここで呼気の流れは [ʃ] では広がりがあり、[s] では細いと推定される。

これは、やはり FORCHHAMMER の説明を裏書きしている。即ち両音の相違は調音点などでは明確に説明できない。更に [ʃ] は舌面で、[s] は舌尖で調音されることもある。音素の示差的特徴として /s/ を「鋭い」/ʃ/ を「鈍い」(摩擦歯音)とするのが適当である。

4.2.3 /p̥ c/ はそれぞれ /p/ 又は /f/, /t/ 又は /s/ と共通点が多いが、p̥ と p では摩擦開放音を従えるか否か、p̥ と f では閉鎖調音が伴うかどうかで対立していると考えられる。/c/ についてもほぼ同じことが当てはまる。この場合に TRUBETZKOY は後者をとって近接相関 *Annäherungskorrelation* と称しているようである。私も /p̥/ の主たる調音点を歯唇とすればこの解釈が適当と考える。

/m n ŋ/ は鼻音調音で共通して、調音点で対立している。/b d g/ は破裂音であるが、これらと鼻音調音でのみ一元的に対立していると解釈される。

/l r/ は流音という調音方法で他の子音と対立し、両者は更に側音か否かで対立してい

る。ここでは今まで見てきたような調音点の対立はない。/r/ は [r], [ɾ], [ʀ], [ʁ] などの異音をもつので震音として定義することは音韻論的に適当でない。そこで /l/ をもとにしてこれを側音とし、これに対する /r/ を非側音とする。これは TRUBETZKOY に従ったものである。

/h/ は唯一の声門子音で他のすべての非声門子音に対している。他の子音がかかわる一切の相関にかかわることはなく、少くともそれらの対比は音韻論上意味がない。

以上の子音の対立関係を TRUBETZKOY に従って図式化すると、大体次のようになるが、これははなはだ暗示的である。⁸⁾ v.ESSEN 1962 も指摘するように縦の行は一元欠如的対立関係を、又横の行は比例的 *proportional* な関係を示している。私に加えた音素には*を附してある。

		*j	v	z	*(z̃)				
		x	f	s	š				*h
p	t	k	p̃	c					
b	d	g							
m	n	ɳ							
								*l	*r

4.3 各音素を示差の特徴に従って以下に定義する。なお、母音については /a:/ 以外の長母音は省略する。

4.3.1 母音音素：

/a/ (平舌広短母音) (*flacher*), *breiter*, *kurzer Vokal*.

/a:/ (平舌) 広長母音 (*flacher*), *breiter*, *langer*, *Vokal*.

/e/ 非円唇前舌中広母音 *ungerundeter*, *vorderer*, *mittler Vokal*.

/i/ 非円唇前舌狭母音 *ungerundeter*, *vorderer*, *enger V.*

/o/ 円唇奥舌半広母音 *gerundeter*, *hinterer*, *mittler V.*

/u/ 円唇奥舌狭母音 *gerundeter*, *hinterer*, *enger V.*

/ö/ 円唇前舌半広母音 *gerundeter*, *vorderer*, *mittler V.*

/ü/ 円唇前舌狭母音 *gerundeter*, *vorderer*, *enger V.*

/ai/ /a/ から /i/ に閉じる (非円唇) 二重母音 *von /a/ nach /i/ schließender Diphthong (ungerundet)*.

/au/ /a/ から /u/ に閉じる (円唇) 二重母音 *von /a/ nach /u/ schließender Diphthong (mit Rundung)*.

/oi/ /o/ から /i/ に閉じる (円唇) 二重母音 *von /o/ nach /i/ schließender Diphthong (gerundet)*.

/ə/ 中立 (短) 母音 *neutraler Vokal (kurz)*.

4.3.2 子音音素：

/p/ 両唇無声硬破裂音 *bilabialer*, *stimmloser*, *harter (Fortis-) Explosivlaut*.

/b/ 両唇有声軟破裂音 *bilabialer, stimmhafter, weicher (Lenis-) Explosivlaut*.

9)

/t/ 歯茎無声硬破裂音 *alveolarer, stimmloser, harter (Fortis-) Explosivlaut*.

/d/ 歯茎有声軟破裂音 *alveolarer, stimmhafter, weicher (Lenis-) Explosivlaut*.

9)

/k/ 口蓋無声硬破裂音 *guttraler, stimmloser, harter (Fortis-) Explosivlaut*.

/g/ 口蓋有声軟破裂音 *guttraler, stimmhafter, weicher (Lenis-) Explosivlaut*.⁹⁾

/f/ 歯唇無声摩擦音 *dentilabialer, stimmloser Reibelaut*.

/v/ 歯唇有声摩擦音 *dentilabialer, stimmhafter Reibelaut*.

/s/ 鋭い無声摩擦歯音 *dentaler, spitzer, stimmloser Reibelaut*.

/z/ 鋭い有声摩擦歯音 *dentaler, spitzer, stimmhafter Reibelaut*.

/ʃ/ 鈍い無声摩擦歯音 *dentaler, breiter, stimmloser Reibelaut*.

/x/ 口蓋無声摩擦音 *guttraler, stimmloser, Reibelaut*.

/j/ 口蓋有声摩擦音 (硬口蓋) *guttraler, stimmhafter Reibelaut (palatal)*.

/p/ 歯唇無声破擦音 *dentilabiale, stimmlose Affrikata*.

/c/ 歯茎無声破擦音 *alveolare, stimmlose Affrikata*.

/m/ 両唇鼻音 *bilabialer Nasal*.

/n/ 歯茎鼻音 *alveolarer Nasal*.

/ŋ/ 口蓋鼻音 *guttraler Nasal*.

/l/ 側音流音 *laterale Liquida*.

/r/ 非側音流音 *nichtlaterale Liquida*.

/h/ 声門 (気) 音 *glottaler (Hauch)laut*.

5 音素の分布

5.1 音節の一般型：ドイツ語の音節は音節主音となる流音や鼻音を単独の音素としたり、二重母音や長母音を音素複合として解釈したりしない限り、音韻論的にみて単一の母音音素を主音としている。この主音の前後にたつ音素はすべて子音音素であるが、それぞれ頭音、末音などと称される。頭音としては1～3、末音としては1～4 (5) の子音音素が現われる。頭音も末音もない音節は母音のみで構成される。Ei, -e. 頭音がない音節は母音ではじまる。ein, aus, euch, in, um, -en. 末音がない場合は母音で終る。Kuh, ja, lau, be-. 二音節以上の形式では音節の結合部に中間子音が現われる。ドイツ語ではこのような形式で、しばしば音節の境界が不明確になる。前の音節の末音としても又後の音節の頭音としても働らくような中間子音では、その所属を明確には解釈できない。nennen /nenən/ の中間の /n/ はそのような中間音の例である。便宜的に次のように表わされる。/ne(n)-(n)ən/ 又は /ne(n)ən/. 後者がより実用的である。¹⁰⁾このよ

うな幾つかの例を示す。Himmel /hi(m)əl/, inning /i(n)ix/, backen /ba(k)ən/, Lippe /li(p)ə/etc. 中間音としては1~4の子音が現われるが、この場合一般に体系的にみて音節の境界は明確である。もち論いづれともきめられない場合もある。

音声的な休止や /+/ をはさむ音素連続では以上でのべた頭音と末音がこの後と前に続きうる。どちらか一方を欠くか、両方を欠くこともある。後者の場合は母音が続くが、音声学的には〔'〕が現われる。gehe aus /ge:ə aus/ [ge:ə 'aus], Beamte /bə+amtə/ [bə''amtə].

5.2 母音の分布：すべての母音は音節主音としてのみ現われるが（実はそのような音素を母音と定義している）その分布は3群に分けられる。¹¹⁾

1. は短母音で、これらはスペース又は /+/ の前に現われない。いいかえれば語末にはたたない。アクセントが加わることも、加わらないこともある。

2. は長母音で、スペースや /+/ の前に自由に分布し、即ち語末にも現われ、アクセントは加わることも加わらないこともある。

3. は2のようにスペースや /+/ の前に自由に分布するが、常にアクセントが加わらない /ə/ である。

1の例外は一音節の語では恐らく na だけであろう。Moulton は tja もあげているがこれは長いこともある。しかし二音節以上の外来語ないしはこれに準ずる形式では語末に短母音がしばしば現われる。この場合標準発音では狭い異音が規定されている。

desto, etwa; Auto, Foto, Juli, Juni, Konto, Opa; Otto, Ida etc. これ以外に間投詞的に用いられた ja ではしばしば短い a が聞かれる。

母音音素は /+/ を介さなくては連続しない原則であるが /ə/ 及び -ig, -isch, -ung などの母音とはいつも〔'〕なしに、つまり /+/ なしに接続する。ruhig /'ru:ix/, -trauisch /-trauiʃ/, Bejahung /bə+'ja:uŋ/, Stauung /'stauŋ/ しかし音節の主音としてはこのような連続は許されないから、次のように別々の音節を形成すると解釈する。擬声音語などの特殊な母音連続もそれぞれ音節を形成するものとみなされる。/'ru:-ix/, /-trau-iʃ/, iahen/i:-a:-ən/, miauen /mi-au-ən/. しかし最後の例などでは早い発話で i が j に代置されることもあろう。とすれば音節は二つになる。

5.3 子音の前後の母音：子音のあるものは母音の前後に たつ場合に分布制限を受ける。/j/ を除けば前の母音が重用である。/j/ だけはこの音素の音声的特徴上 /i/ の前に現われない。/ö, ai, oi/ の前でも分布しないが、これには必然的理由はないと思われる。

/b d g/ は一般に長母音、二重母音の後に分布し、短母音の後に現われるのは低ドイツ方言由来の形式に限られる。lieben, reden, liegen; ebben, robben, Stubben, Bodden, Kladde, Roggen.

/v/ は母音の中間に現われることは少いが、その場合は長母音の後に限られる。これは /z/ でも同様であるが、ここでは二重母音の後でも分布している。Löwe, Möwe,

hieven; Rasen, reisen, Rose, sausen, Mäuse etc.

/š/ は原則として短母音と二重母音の後に分布するが、例外もある。rasch, löschen, Busch, Rausch, heischen, keusch; Rüsche /rū:šə/.

/p/ は短母音の後に分布する。Kopf, Topf, Napf, hüpfen etc.

/c/ も多くは短母音と二重母音の後に分布するが、例外もある。Satz, Blitz, reizen, Weizen; Flöz /flö:c/.

/ɒ/ は短母音の後にのみ分布する。gelungen, hängen, singen, bang, Ding, Klang.

/r/ は長母音と短母音、それに中立母音 /ə/ の後に分布するが、二重母音の後には分布しない。Haar, Uhr, Herr, wirr, Zimmer etc.

いうまでもなく以上のうち /ɒ/ を除いた、他の子音は長母音や二重母音の前でなら分布は制限されない。

一般に子音結合は長母音や二重母音の後では分布が制限される。二子音結合では末音が -t, -s のものや三子音結合では末音が -st のものでは制限は大きくない。しかし四子音結合の前では制限は大きく、長い母音はまず例外的といえよう。もち論三子音結合以下であっても /ɒ š p/ などを初音に含んでいるものでは、同様長い母音の後での分布はみられない。このようにみれば子音結合の前では短母音が最も広く分布する母音音素であることがわかる。四子音結合の前の長い母音は (du) peitschst, (du) feilschst, (du) latschst 位であろう。

/ə/ は /t s m n l r/ の前にしか分布しないが恐らく /h (j)/ を除くすべての子音の後にたちうる。

他に /s x ɒ, j h/ などの一般的制限は次節に記す。

5.4 子音の分布：発話の初頭に現われるのは /ptk b d g p̃ c f s̃ v z j m n l r h/ (18) である。/s x ɒ/ はここで現われない。¹²⁾ しかし音節の頭音としてなら前の二音素は現われる。Märchen /me:r+xən/, Bücher /bü:-xər/, reißen /rai-sən/, Flüsse /flü(s)ə/etc.

発話の末尾に現われるのは /p t k p̃ c f s̃ x m n ɒ l r/ (14) で /b d g v z j h/ (7) はここでは現われない。¹³⁾ しかし音節の末音としてなら /b d g v z/ は分布する。ordnen/ord-nən/, Wandlung /vand-luɒ/, Regler /re:g-lər/.

/+ / やスペースを介さないで母音間に分布する子音音素は /h j/ 以外の全部であるが、これらも例外的な語や個人や方言などに分布している。Ahorn, Uhu, Boje, Kajüte; gehen /ge:ən/ を /ge:hən/ とする個人は割に多い。

一般的な子音の結合の型は発話の（同時に語や形態素とも大体一致するが）初頭では、噪音子音と楽音子音、末尾ではこの逆順の結合である。¹⁴⁾ 初頭では三子音までであるが、末尾では4（5）まで可能で、末尾の場合末音に -s, -t, -st をもつものが多く、四子音結合では -st, -ts の末音をもつもののみがみられる。この前の二子音は大体二子音結合として分布するものである。

pl-, bl-, pr-, br-, kl-, kr-, kn-, fl-, šl-, etc.; šp-, št-, kv-, šv-, cv-;
špl-, špr-, štr-, etc.

-lp, -rp, -mp, -lt, -rt, -nt, -ls, -rs, -lš...; -pt, -ps, -kt, -ks, -st, -ct, ...;
-lm, -ln, -rl, -rn, -rm...; -lpt, -rkt, -ršt, -lps, -mps, -rks,...; -lpst, -rnst,
-lfst, -rkts, -ŕkts, etc.

中間子音結合は末尾の型のものかこれに平行する -lb-, -mb-, -nz-, -lz-, ld- など
が現われるが、他に末尾型結合と鼻音、流音の結合する型が独特なものとしてみられる。

-bn- ebnen, -gn- regnen, -xn- rechnen, -kn- trocknen, -tm- atmen etc. (注
を参照)。¹⁵⁾

6 各音素の異音¹⁶⁾

6.1 母音: 6.1.1 短母音:

/a/ [a], [a] acht [axt, axt] . やや前の方で調音される明るい音色の [a] が普通である。しかし方言や個人によっては、やや後の方で調音される暗い音色の [a] が現われる。両音は大体自由変異音とされる。DUDEN, SIEBS ではこの区別は規定されていない。

/e/ [ɛ] Held, hält [helt] . 広い e 音が現われるのが普通であるが、早いルーズな調音などではアクセントのない位置では /ə/ に置き換えられることがある。ver-, er- [fər-, tsər-/fər-, tsər-] .

/i/ [ɪ] Bitte [brɪtə] . 広い i 音が現れる。

/o/ [ɔ] Kopf [kɔpf] . 広い o 音が現われる。

/u/ [ʊ] Mutter [mutər] . 広い u 音が現われる。

なお邦人は一般に円唇の u 音をもたないので充分注意して習得しなくてはならない。

/ö/ [œ] Hölle [hœlə] . 広い ö 音が現われる。

/ü/ [ʏ] Hütte [hytə] . 広い ü 音が現われる。以上二つの円唇前舌母音は一般には張唇のものより幾分調音位置が後退する。邦人は前者を /e/ で後者を /ju/ で置き換がちであるが Hölle/helle や jung/jünger などの音韻論的対立を損うから充分注意しなくてはならない。この点発音を示すためのカナ表記ははなはだしく不適當である。

以上の短母音に /a/ を除き狭い異音が、外来語、複合語などの主要アクセントのない位置に現われる。前置詞のような語にもみられることがある。DUDEN の記述によってもこれらの音は口語発音では広い異音と自由変異関係にあると推定される。lebendig, Hollunder, vielleicht, wieviel, Union, zum, möblieren, Hypothese; なお Auto, Saldo etc. 参照。

又短母音について邦人は国語に同化した、はなはだ目立つ音素の置き換傾向を示すがさけるよう充分気をつけなくてはならない。それは backen, ich などをつまる音 (/Q/)

や *nennen*, *kommen* などではねる音 (/N/) を加えてそれぞれの子音を長く発音する傾向である。ここでは短母音音素が /aQ/ や /eN/ でおきかえられているということになる。

6.1.2 長母音:

/a:/ [a:] , [a:] . *haben* [ha:bən, ha:bən] . 普通前者が現われるが方言や個人によっては後者も自由に変異しうる。ハンブルクなどでは前者が普通とされている。標準発音ではこの区別を規定していない。

/e:/ [e:] *leben* [le:bən] 狭い e 音が現われるのが普通。しかし広い e 音 [ɛ] が ä, や äh の正書法の綴りのため、しばしば公式的な、ないしは意識的な発音で聞かれる。後者は /e:/ の様式的な異音と解した方がいい。Seele [ze:lə] , Säle [ze:le, zɛ:lə] .

/i:/ [i:] *bieten* [bi:tən] . 狭い i 音が現われるが、この母音は口の開きは最も狭い。17)

/o:/ [o:] *loben* [lo:bən] . 狭い o 音が現われる。

/u:/ [u:] *Hut* [hu:t] . 狭い u 音が現われる。この母音の円唇は短かい u 音と同様注意を要する。

/ö:/ [ø:] *hören* [hø:rən] . 狭い ö 音が現われる。

/u:/ [y:] *Hüte* [hy:tə] . 狭い ü 音が現われる。これら両音については短母音についてと同様円唇が重要である。

a 音を除いて、それぞれの狭い異音と広い異音は長さ /:/ に結合する条件異音と解釈できる。

6.1.3 二重母音:

/ai/ [aɪ] , [ae] *Reis* [rais, raes] . [a] から [i] に向って調音点が前方に移動すると同時に閉じる二重母音であるが、主音は [a] でいわゆる下降二重母音とされる。しばしば副音が [e] で実現されるが両音は自由に変異する。方言によってはこの副音が [i] に近くなるものがある。

/au/ [aʊ] , [ao] *Maus* [maus, maos] . 同様下降二重母音。調音運動に円唇が加わる。しばしば副音が [o] となる。両音は自由に変異する。

以上の二つをカナ表記で「アオ、アエ」などするのは余り適当でない。「アウ、アイ」の方が適している。

/oi/ [ɔy] , [ɔφ] *Leute* [lɔyte, lɔφte] . 同様下降二重母音であるが、/o/ から /i/ に向う調音は [ɔ] で開始され [y] ないし [φ] の円唇前舌母音で終る。この両音は自由に変異する。

6.1.4 /ə/ [ə] *Leute* [lɔytə] . 非円唇ないし弛唇の中舌母音で常に短かい。アクセントのない [ɐ] や [e] の（或いは他の母音の）代りに現われることもある。

この母音は流音や鼻音と結合されると、(アクセントはいつもない) 音節主音となる子音として実現されることがある。/əm, ən, əl, ər/ は語末や子音の前では [əm, ən, əl, ər] か [m, n, l, r] として実現される。後に母音が続く場合は、しばしば /ə/ は脱落するが音節主音となる子音は現われない。これらは一応条件付の自由変異と評価されよう。

/ən/ は更に他の子音に同化して [m, ŋ] となったり、長い子音 [n:] などが現われたりするが、これらは場合によっては音素の代置と解釈しなくてはならない。

/ər/ は更に [ɐ] として現われ、又時に [ə] となって実現されるがこれについては /r/ の項で記載する。

又 be- や ge- などの形式でも /ə/ が早い発話などで脱落する。

leben /le:bən/[le:bən, le:bn, le:bm], sinken /ziŋkən/[ziŋkən, ziŋkn, ziŋkŋ],
Sinnen /zinən/[zinən, zin:], Wandel /vandəl/[vandəl, vandl]; Wanelung
/vandəluŋ/ Wandlung /vandluŋ/, gefangen /gə+faŋən/, /g+faŋən/.

6.1.5 以上の母音音素のうち/ə/を除くすべては初頭位置(発話、語、形態素を含めて)では[']を伴って実現される。但しこの[']は早いかルーズな発話で現われないこともある。['a] と [a] などは従って条件付の自由変異音となる。aus /aus/(['aus], beenden /bə+endən/[bə''endən] .

6.2 子 音: 6.2.1 破 裂 音:

/p/ [p^h], [p] Pein [p^hain], abfahren [''apfa:rən] .

/t/ [t^h], [t] Teich [t^haɪç], liebt [li:pt] .

/k/ [k^h], [k] Karten [k^hartən], Fuchs [fuks] .

この変異ないし異音関係については 3. 2. 1 を参照。

なお DUDEN や SIEBS が規定する abwischen [''ap^hviʃən] や gibt [gɪp^ht^h] はまれにしか聞かれなないと WÄNGLER は報告している。この音の習得には従って余り帯気音にこだわる必要はない。それに国語でも或程度の帯気音が存在する。

なお明確な発音(多分誇大発音と称していいが)では末尾の /t/ が [ts] に近く現われる。私の報告者でもしばしば観察した。

/b/ [b], [b̥] Bein [bain], neblig [ne:blɪç] .

/d/ [d], [d̥] dein [darn], Radler [ra:dlər] .

/g/ [g], [g̥] Garten [gartən], regnen [re:gnən] .

無声異音は早い或いはルーズな発話で子音(噪音子音の前では現われないから/m, n, l, r/などを指す)の前で多く現われるが、方言や個人によっては絶えずこの異音のみがここに現われ更に語頭や母音間でも現われることがある。又 /p t k/ との対立がない方言もあることが報じられている。

報告者では Laken/lagen の発音において [la:k^hən] / [la:g^hən, la:gen] がきかれた。

即ち有声の〔g〕は可成り努力しなければならないかのようにであった。又ハンブルクで Joghurt, Signal [jo:ɡurt, jo:kurt, zign̩a:l, zikna:l] のような発音にはしばしば接した。

これら両異音は一般の発音の場合、条件付自由異音とみなされる。

最後の /g/ を邦人はよく語中や /n/ の前で /ŋ/ に代置する。いわゆる最少対立はまれであるが lagen/langen, Wagen/Wangen など誤解に通じるから注意しなくてはならない。私は報告者でも Agnus Dei の発音でこのような代置をきいたが一般に無声化の傾向の方が強い。

6.2.2 摩擦音:

/f/ [f] fein [faɪn]. 邦人は [ϕ] による代置をしないように注意しなくてはならない。

/s/ [s] reißen [raɪsən].

/ʃ/ [ʃ] Schein [ʃaɪn]. 北ドイツ方言では語頭の /p, t/ の前で /s/ に代置される。

/x/ [x], [ç] Bach [bax], ich [ɪç]. 3. 2. 2 でみた通り代表的条件異音である。前者は /a o u au/ の後にもみ現われ、後者はそれ以外の場合に現われる。形態素 -chen と外来語 Chemie などにもこの [ç] が現われるが、外来語では /k/ で代置されることもよくある。Chemie /ke'mi:/.

語末の [x] はしばしば強い発音で [x̥] をきくことがある。報告者で数回観察した。なお [x] を /e/ などの前で [ç] とする邦人の代置は注意しなくてはならない。

/v/ [v] Wein [vaɪn]. 方言などでは両唇で調音されると報告されている。又 v で綴られる外来語の /v/ はしばしば /f/ に代置される。Vulkan /vul'ka:n, ful-/ , evangelisch /evaŋ'ge:liʃ, efaŋ-/etc.

邦人はこの音素を国語の音韻体系への同化から /w u b/ などで代置しがちであるが、特に /b/ での代置は音韻論上注意しなくてはならない。次のような最小対立は無効となるからである。Bann/wann, Bahn/Wahn, bar/war, Bein/Wein, Bissen/wissen, billig/willig, Bohnen/wohnen, binden/winden, Bund/wund etc. MARTENS は歯唇で調音しても破裂音のように発音すると Bein/Wein の区別が付きにくいことを指摘している。示差的特徴を二つまで変えるような代置は混乱を招く。

/z/ [z] Sonne [zɔnə]. 南ドイツ方言などにはこの音素がなく /s/ で代置される。BRANDENSTEIN, FORCHHAMMER にも報告されている。

邦人はザ行の子音が初頭にあると [dz] を発音するので、この位置の [z] はなかなか困難なことを服部も指摘しているが、音韻論上は /v/ の /b/ による代置ほど危険ではない。しかしはなはだ目立つ誤解に通じやすい。これに反して i の前では [dʒ] がよく代置され Sie sind... を [zi: zɪnt...] の代りに [dʒi: dʒɪnt] とするのは以上の場合より重大である。例えば外来語を含めると Sinn /zin/ と Gin/dʒin/ のように示差的に対

立することもあるのでさけるべきである。

/j/ [j] Junge [juŋə]. [j] が広く調音され母音化する例が報じられているが、ルーズな発話での例である。[‘juŋə] の代りに [e’uŋə] WÄNGLER. /g/ の代りに /j/ が専ら現われる方言がある。

以上の三つの有声摩擦音は無声噪音子音で終る形式に続く場合に、口語ではしばしば無声化する。absagen/ap+za:gən/ [‘apza:gən, ‘apsa:gən], wegjagen [‘vekça:gən] WÄNGLER. 厳密に言えば音素の代置とも考えられる。

6.2.3 破 擦 音:

/p/ [pf] Pfanne [pfanə]. [p] に帯気音が現われることはない。/f/ に代置される方言がある。このような方言では /p/ と /f/ の音韻論的対立はない。

/c/ [ts] Zahn [tsa:n]. 同様[t] に帯気音が現われることはない。/nc/などでcがsに代置されることがある。又語頭の/c/も[s]或いは[θ]に近い音で発音されるのを観察したが、このような個人はいるらしい。/e i/の前の/c/を/tʃ/に代えて, Abc /a:be:’ce:/を/…’tʃe:/[…tʃe:], ziehen /ci:ən/を/tʃi:ən/[tʃi:ən]としたりする邦人の代置傾向ははなはだ目立つ。

6.2.4 鼻 子 音:

/m/ [m] mein [main]. Kampf, Senfなどで同化によって歯唇で調音されるm音が現われることがあるが、後者では音素の代置がみられる。

/n/ [n] nein [nain].

/ŋ/ [ŋ] singen [ziŋən]. この音素の代りに絶えず /ng/ か /nk/ を代置する方言や個人もある。外来語の語中の -ng- の綴りは絶えず [ŋg] (音素としても同じ) が標準発音では規定されている。Singular [ziŋgu’la:r], Pinguin [piŋgu’i:n] etc.

6.2.5 流 音:

/l/ [l] leiten [lartən].

/r/ [r], [ʀ] Rose [ro:zə, ro:zə]. この両音は 3.2.6 でふれたように自由変異音である。調音点の相異は割と大きいが聴覚的には非常によく似た音である。¹⁸⁾ 今日ハンプルクでは大体 60 才位以上の方は [r] を、それ以下の若い世代は [ʀ] を専ら発音しているようである。WÄNGLER は今日 [r] を発音すると特に若い人の中では目立って古くさい印象を与えると報告している。しかし全体としてみれば [r] が全く聞かれないわけではないし、方言によっては発音されるし SIEBS はやはり [r] を推す。又声楽では [r] が好まれるらしい。結局 MARTENS のいうように発音しやすい方をえらぶといい。従って両音はあえていえば地方的ないし年令のスタイルを現わす様式的な異音とされよう。邦人もいずれの異音をえらんでもいいわけで [ʀ] の方が今日の西ドイツでより多く聞かれるという理由でこれにこだわる必要はない。

[ʀ] は語末でしばしば無声化するが [ʁ] に退化すると [x] との区別がつきにくい。

このような発音しかできない個人が時々いる。Ort, kurz は [ɔxt, kuxts] に近く聞える。このような話者では Art/acht, dort/Docht などの対立は弱い。一方 [r] は歯茎に一度しかふれない弾音に退化するが、この音は国語のラ行子音（母音間で）に近い音とされている。

これら両自由異音と条件付の自由異変関係にたつ異音がある。それは

[ɐ] で、これは絶えず母音の後にのみ現われ上述の異音と自由変異しうる。しかし口語発音ではこの位置の /r/ は専らこれに限られるからむしろ条件異音とも解されよう。Rose [r-, rɔ:zə], Uhr ['u:r, 'u:ɐ, 'u:ɐ], Zimmer [tsimər, -r, tsiməɐ, tsimɐ, tsimə]. 最後の2例は音素代置の例であろう。[tsimɐ] は [ə] の脱落とも解される。又この [ɐ] が消失する代りに前の a 音が長くなる例が報告されている。Barmbek [bɑ:'n-bek], Garten [gɑ:'tən] (WÄNGLER)。

なお邦人がこれら二流音素を音韻論的に区別できず、しばしば国語の音素 /r/ で両方を代置する傾向は有名であるが絶対にさけなくてはならない。最小対立の例を以下に示す。

Rand/Land, Rast/Last, rechnen/lecken, regieren/legieren, Rektor/Lektor, Rippe/Lippe, rutschen/lutschen, Frucht/Flucht, hart/halt, Gras/Glas, spüren/spülen, warten/walten etc.

6.2.6 気音 : /h/ [h] Hof [ho:f]. 早いか、ルーズな発話などで有声音間の [h] が有声になったり又他の場合で脱落することがある。Bahnhof, Musikhalle [ba:nho:f, bano:f, muzi:kalə]。

邦人は i の前で [ç] を発音したり u の前で [ʁ] を発音したりする傾向がある。それぞれ /x, f/ の音素との混同を招くので注意しなくてはならない。hier/China, Hund/Fund etc.

7 強勢と音調

7.1 強勢 : ドイツ語は二音節以上の形式ではそれぞれの音節は強勢の点でも対比しており、通常このうちの一音節のアクセントが最も大きい。多音節の形式では、可能性としてはこのアクセントに無数の段階が考えられる。Aussprache では aus, spra, che の順であろう。しかし Gerhardt-Hauptmann-Platz で Haupt は一番強いが、Platz と Ger- とではどちらがより強いかが決めがたい。Gérhardt, Háuptmänn は全体として Gèrhardt Háuptmann にまとめられる。一般にドイツ語のアクセントはアクセント単位の直接構成成分間でのみ明確であるように思われる。Gerhardt-Háuptmann-Plätz では Gerhardt-Hauptmann と Platz が直接の構成成分となり、ここで前者のアクセントが全体をまとめている。

Hier ist ein Bleistift. でもし ein が最も強く発音されれば、まずそれは éin Bléistift のように前者が強い型のアクセントをとり、更に全体としては後者が強い型のアクセントにまとめられていると解釈される。ここで各単位の可能なアクセントを考えてみると次のようになる。Bléistift; èin Bléistift/éin Bléistift; h́ier ist/h́ier íst; hier ist ein Bleistift (´ ´ ´ ´). 従って高度の単位では次第に弱いアクセントは対比の直接の対象ではなくなっていく。ところでアクセントは、このように単位の直接構成要素間の対比によって表わされるが、この要素が三つ或いはそれ以上のときもある。この場合は一つの強いアクセントが他のほぼ同じに弱い幾つかの成分に対比される。Abc [a:bè:tsé:], UKW [ù:ka:vé:], schwärzròtgold etc. これらが更に大きな単位に加わると通常一つの強いアクセントが他に対比される。Abc-Schütze, UKW-Sènder (Schútze, Sénder). 三音節以上の形態素や外来語でもこのような対比が現われる。Hòlúnder, Fòréllè, Àkàdèmi etc. もち論この場合弱いものにも段階は現われうるが対比の作用はほとんどない。

本来のドイツ語では次のように大体次第にまとめられて行くものとされよう。éinig, vèréinigen, Veréinigung etc.

一般的にみてこの対比には [´ ´] [´ ´] の二種の型がある。前者は普通の二音節の形態素や普通の合成語、語群では特に前の要素が強調された場合に、後者は外来語や派生語、それに普通の語群に現われる。Gábè, 'Ambòß, 'Arbèit, Hébel, lésèn, wándèln; ábfahren, Sónntàg, Réichtùm, 'Einheitlich-kèit; éin Flùß, schöne Fräu / stùdieren, Stùdènt; bègéhen, Gèbäude; schöne Fräu, Thòmas Mánn, Ùnsernhérrn, Liebfräuen(milch) etc.

この二つの型は大体相補的に分布するが語群では音韻論上、示差的ともみられる。他方次のような例では両者はいわば自由変異で分布するといえよう。unerfüllbar (ún-füll-, ùn-füll-), Passiv (ㄥㄥ/ㄥㄥ) .

しかしいわゆる分離または非分離の動詞といわゆる一群の複合動詞ではこの二型のアクセントは示差的である。úbersetzen /ùbersétzen, úmlàufen / ùmláufen etc. 又 blútàrm (sehr arm) とされているがむしろこの場合は後者の型のアクセントが現われると解する方がいい。とすればこれらの形式でも両アクセント型は示差的である。blútàrm/blútàrm, stéinrèich/stéinrèich etc.

この構成要素が明確であれば、これらのいずれかにアクセント記号をつけるだけで充分である。/'ü:bər+zecən, ü:bər+'zecən/ etc.

他方これらの対立がないような形式でも、例えば /'arbàit/ などでも */àrbàit/ とすると意味を取違えなくても誤解されやすい。即ちこのような形式のアクセントは直接示差的でなくても分節音素の特徴を強める背景として重要であるので、いつもアクセントが現われない /ə/ を除いて二音節以上あるような形式では、この意味でアクセントが表

わされなくてはならない。私はこれを母音の下に „・“ で示し // があるときはこれを省略することになっている。/ü:bər+ˈzecuðs+proble:m/, /ger+hart ˈhaupt+man plac/.

文などで、以上は論じられない複雑な場合も、もち論ある。

7.2 音調：イントネーションで音韻論上、最も重要なのは発話ないし文の末尾においてである。v.Essen 1964 はドイツ語の音調を分析した結果、大体次のような三つの示差的な音調素とでもいうべきものを抽出した。即ち1.非終止的ないし継続的 *progre-dient*. 2. 疑問的 *interrogativ*, 3. 終止的 *terminal* である。

1 は一般に発話が終止しないで続けられることを示し、音調は大体、平らにつまり上下に移動しないで宙に浮いたようになるものをいう。短文の集合などで各短文の末尾にこの音調が現われる場合、話手は明らかに全体をより大きな単位とみて、各短文は完結したものとして解していないことによる。これを /→/ とするが又 /,/ などでも表わされよう。a) Als es Abend wurde /→/, fing es an zu regnen. b) Ich habe getan /→/, wie mir befohlen war. c) Die Sonne scheint /→/. Die Blumen blühen /→/. Die Vögel singen /→/. Altes Herz wird wieder jung. (v.Essen 1964) .

2 はいわゆる決定疑問文 *Entscheidungsfragen* に現われるもので、音調は最後の音節で、その前のものより目立って高くなる。普通の配語法の文でもこの音調によって疑問文として働きうる。他方いわゆる補足疑問文 *Ergänzungsfragen* では一般に次の3の音調が現われるが、反問とか非常に丁寧な場合などにこれが現われる。又対をなす疑問文 *Doppelfragen* では前半ではこの音調や1が現われるが後半では3かこの音調が現われる。/↑/ とする。a) Ist die Zeitung schon da /↑/ ? b) Heißt du Hinz /↑/ ? c) Verreisen Sie in den Ferien /↑/ ? Oder bleiben Sie hier ? (v. Essen 1964)

3 は2の逆の音調で下降するもの。普通文や補足文、疑問文の語順でもそうでないもの、二重疑問文の後半などに現われる。これは /↓/ とする。a) Ich gehe aus /↓/. ... fing es an zu regnen/↓/. b) ...Oder bleiben Sie hier /↓/ ? c) Wo bin ich /↓/ ? d) Bist du dabeigewesen /↓/ ? e) Wie gemütlich ist das /↓/ ! 最後の例は感嘆文である。(v. Essen 1964).

7.3 接続ないし境界記号：TRUBETZKOY は語や形態素の境界を示す記号についてふれているが、例えば語（ないし形態素初）頭にしか現われない音素は自動的に境界を指示する。ドイツ語では原則として /h/ と /j/ であろう。逆に語頭に現われない音素は消極的ではあるがそこに少なくとも語頭がないことを指示する。ここでは /ə ɐ/ が語末については /b d g v z/ がこのような音素である。しかし境界標識としては /h/ ほど有用でない。

これらと並んで特定の子音の連続はしばしば境界を示す。例えば同じ音素の連続はその中間に境界がある。又 -sf-, -km- などでも、つまり子音分布の項で記述した型に属さないものはこのような境界を示す。

他方異音によってこれが示されることもある。代表的な例は〔ʼ〕と〔^h〕であり、これは初頭位を示す。又 /x/ も /a, au/ などの後では〔x〕が現われるのに〔ç〕が現われればこれは形態素の初頭を指示するといえる。

このように音韻的、音声的、積極的、消極的、単一の或いは複合の境界標識が現われる。しかしこれがいつも明確とは限らない。音声休止のスペースがない場合しばしば問題が複雑になる。例えば *tauchen/Frauchen* は /-auxən/ としてしか表わさないならば異音まで記述しないかぎり /x/ の異音は不明である。とすれば類似音声環境で〔x〕と〔ç〕が示差的对立をなしているとも解釈される。しかしここに形態素の初頭位を示す記号があればこの両音は相補的に分布するものと評価される。ここで境界標識として *MOULTON* にならって /+/ を取入れると便利と思われる。この音声的な特徴を見出し定義するのは、はなはだ困難であるが、形態論的観点を導入して、音声休止はないが、形態の切れ目のある部分にこれを用いる。こうすると多音節の形式での〔^h〕や〔ʼ〕も簡単に異音の特徴として記述できるわけである。この形態素の切れ目をどこまで適用するか、はなはだ難かしいが、例えば子音の形態素（子音結合では全く便宜的に - を用いて区別したが）や、決して〔ʼ〕が現われない /-ə, -ən..., -ix, -is, -uθ/ などではこのような境界はないものと解する。 *tauchen* /tauxən/, *Frauchen* /frau+xən/, *erinnern* /er+ʼinərən/, *Verein* /fer+ʼain/, *auftauchen* /ʼauf+tauxən/ [ʼauf^hauxən] .

1. DUDEN 40, 43

2. 例えばハンゲルクでは *nein* に当る方言で [næ:] (或いは [nɛ:]) がきかれる。

3. 世界言語概説上巻によればフランス語の [ʌ] は16~17世紀頃 [i] に変わったらしいのでドイツ語へ取入れられたのは [ʌ] か [i] かはつきりしない場合もあるが *Medaille* /me'daliə/, *Billet* /bi'ljet/, *Pavillon* /paviljon/ はこの例とされよう。他に *Pssacaglia* /pasa'kalja/, *Kamarilla* /kama'rilja/ (DUDEN)。

4. これは音声学的には例えば呼吸の平均消費量 DLV の面からも説明される。

5. TRUBETZKOY はドイツ語の長母音、二重母音を単一の音素と解釈していることについては先にもふれた。ところが、これらのうち二重母音を音素の複合と解釈するのは MORCINIEC である。(彼は子音では破擦音も音素複合と解釈する)。更にこの両方を音素複合と解釈するのは HOCKETT である。解釈の一般的可能性は、単一か複合か、後者ならば母音+母音か母音+子音かが問題になる。MORCINIEC は *Greis/Graus*, *Eule/Eile* でそれぞれ i/u, o/a の音節主音、副音が示差的对立するので、それぞれは単一の音素で、二重母音は二つの母音音素の複合ないし結合と考えたいらしい。彼は長母音は恐らく単一音素と解している。ところが HOCKETT は恐らく英語の母音体系の解釈の影響を受け、一音節の形式の音節構造から暗示されて、すべての長母音、二重母音を短母音と /wyh/ との複合と解釈している。彼によるとドイツ語の母音音素は次のようになる。ここで /y/ は /i/ に *eh* は /ä:/ に相当する。

simple	i	e	a	ü	ö	u	o
complex	iy	ey	ay	üy	öy		oy
			aw			uw	ow
			eh	ah			

ここで /y h/ は音節頭音ともなるので半子音 *semiconsonant*, /w/ は音節副音としてしか現われない

から副母音 *covowel* とされる。

これは標準ドイツ語 *standard German* の一変種を分析した結果だそうであるから、こうした母音体系が見出されるドイツ語もあらうかと思われる。しかしここで /ieuø/ の後の /y/ は、狭い前舌母音への移動 *glide* のこともあるが、むしろ単なる狭めの長母音を示すもの *raising lengthener* であるとされているが、音声学的に言えば [ɪ] を [i:] にするということであるから、MOULTON の /ɪ:/ に相当する。この代りに /y w h/ を仮定しているに過ぎないともいえる。HOCKETT 自身認めるように標準ドイツ語の長母音は二重母音的には発音されない。これについては TRUBETZKOY 1962, 109 も注目している。又 h は /a/ や /e/ の後ばかりでなく他の母音の後にも確認できる。要するにこの解釈は一般的には音声の裏付けが弱い。しかし二重母音ではこの点 /y w/ を分析するのは必ずしも不当ではない。この解釈で最も有利なのは多分音節の型が、(C)VC と統一でき Mai /maj/, rauh /raw/ などが Mann /man/, rann /ran/ と平行させられることであろう。しかし二重母音や長母音の後に子音がたつ音節の型もあるのですべてが解決されるわけではない。HOCKETT の解釈はしかし音韻論的分析の一つの可能性として確かに面白い。どの可能性をとるか時にきめ難いこともあるが、PIKE はより便利な方法に従うことをすすめているがそれも一法であろう。

6. 押韻などから推察すると中高ドイツ語でもこのような音韻分析が可能であろう。MF 20-16/17, 139-20/21/22 など参照。

7. Jiddisch は $\underset{1}{j}idix$ と発音されるようである。

8. もち論次のように並べかえることもできよう。

h									
j	x	k	g	ŋ					
v	f	ǃ	p	b	m	r			
z	s	c	t	d	n	l			
(ž)	š								

	v	f	ǃ	p	b	m			
	z	(ž)	s	š	c	t	d	n	l
	j	x				k	g	ŋ	r

h

又これらを調音点の群に分けた BRANDENSTEIN の図式はなかなか面白い。

b		d		g	
m	p	n	t	ng	k
w	pf	[z]	ts	j	(kch)
f		β		ch	
		sch			

9. 非鼻音 *nicht-nasal* については特に加えなくても破裂音という表現で充分である。

10. これは HOCKETT にヒントをえた。

11. MOULTON による。

12. 従って外来語の語頭の /s/ は母音の前では /z/ 又 /p t/ の前では /s/ で代置される。Saison /ze'zon/, Sensation /zenzaci'o:n/ Serie /ze:riə/, Sex /zeks/, Sport /šport/, starten /štarten/, 但し City /siti/.

13. 外来語でもこの分布に次第に適応して代置が行なわれる。Band /bant/ Jazz /džes/, Lord /lort/, Nerv /nerf/, Snob /snop/, Standart /štandart/ etc. しかし接頭辞の末音の -b, -d については DUDEN で /p t/ の規定でも次のような形式で /b d/ と解すべき発音が、少なくとも北ドイツでは一般的であった。Adjektiv, Objekt, Adverb, Admiral etc.

14. 従ってフランス語などの外来語でみられる -bl のような結合は [bəl] (或いは [-blə]) と発音

され、綴りも改めたものがみられる。Ensemble [ã'sā:bl], /aŋ'saŋbəl, an'sanbəl, -blə/, praktikabel, flexibel etc.

他方語頭では可成りの外来結合が取入れられているのは注目していい。これらは上の例のような結合型の原理的なものにならなっていることと TRUBETZKOY 1962, 229 が指摘するように既に語間などに中間的な子音連続として存在するからであろう。ks-, ps-, (pn-, pt-,) sf-, sk-, skl-, sm-, sn-, sc-, tš-, tv- etc. 同じような原則で -sk Kiosk, burlesk などが入れられた。

15. Tanaka : Konsonantenverbindungen im Deutschen 1964 への補遺を記載する。一部は「ドイツ文学31号」の拙論には入っているのが手違いで脱落したものである。

zu 8. /st/ Gischt, /xt/ recht, /x-s/ Buchs, /xc/ Geächz

zu 9. /nf-s/ Senfs, /rf-t//mp-s//ŋk-s//lp-s/ の代りに Werft, Pamps, Gunks, Rülps

zu 13. /rl/ perlen

zu 16. -K(KK)-n-Typen :

/bn/ ebnen	/dn/ Redner	/gn/ regnen
/pn/ wappnen	/tn/ Plattner	/kn/ trocknen
/fn/ öffnen	/sn/ Mesner	/šn/ Täschner
/xn/ rechnen	/mn/ Vervollkommner ;	
/ldn, ndn, rdn, rfn, ntn, rntn, rtn, lkn, rfn, lsn, rsn, lxn, rxn/.		

-K-m-Typen :

/tm/ atmen	/dm/ widmen.
------------	--------------

-K(KK)-l-Typen :

/bl/ hoble,	/dl/ radle	/gl/ regle
/pl/ staple	/kl/ mäkle	/zl/ nāsle
/sl/ fessle	/xl/ lächle	/pl/ gipfle
/fl/ tafle	/ml/ sammle	/nl/ ähnle
/hl/ klingle ;		
/rbl, ndl, ldl, rdl, rgl, lpl, mpl, rpl, spl, ftl, xtl, ltl, rtl, stl, nstl, ŋkl, rkl, nzl,		
ksl, nsl,psl, ncl, rcl, rfl, lml, rml/.		

-K(KK)-r-Typen :

/br/ säubre	/dr/ gliedre	/gr/ lagre
/kr/ ackre	/fr/ liefre	/pr/ opfre
/cr/ glitzre	/mr/ krämre	/nr/ verfeinre
/zr/ fasre	/gr/ verlängre	/lr/ schmälre ;
/ldr, ndr, rdr, rgr, lpr, mpr, rpr, spr, ftr, xtr, ltr, ntr, str, lfr, nstr, lstr, mstr, lkr,		
ŋkr, lfr, ndlr(?), ncr/.		

これらのタイプの -K(KK)- の末音 /b d g z/ は無声化することが多いので /p t k s/ との対立は弱くなる。この位置で帯気音が現われることは余りない。個人や方言によっては、有声噪音子音を末音とする結合が現われない。DUDEN の記述はしばしば理想にすぎない。又 /ns ls ls/ の結合の代りに /nts lts lts/ が現われる個人が割合いる。

16. 音素の各々について主要な異音を記載するが詳細な音声学的な記述は行なわない。なおドイツ語内の音素の代置や、邦人の誤れる代置の傾向も合わせてところどころで指摘しておいた。応用面で役立てば幸いである。6. 2. 5 以外では /r/ は [r] としてある。

17. MARTENS が Miete で調べた口蓋図 *Palatogramm* (口蓋内に人工口蓋を入れて調べた、舌と口蓋との接触面の位置や大小を示す図形) によると接触面は全体の約 $\frac{2}{3} \sim \frac{3}{4}$ にも達し Januar の j などより大きい。

18. 慶応大学の鉄野氏によると、氏の〔R〕音をハンブルグ大学音声学研究所の某博士が〔r〕と聞き違えたということだから、時に専門家にも聞きわけられないこともありうる。もっとも日本人は普通〔r〕（もっとも〔r〕もあろう）が多いので、先入観もあったかもしれないが。なお同研究所長のエッセン教授は〔r〕しかうまく発音できないようであった。

この小論は一部を1964年/65年度フンボルト奨学生としてのドイツ滞在中の調査研究にもとずいている。

参 考 文 献

- Brandenstein : Einführung in die Phonetik und Phonologie, Wien 1950
 van Dam, J. : Handbuch der deutschen Sprache, Bd. 1, Amsterdam 41957
 Dieth, E. : Vademekum der Phonetik, Bern 1950
 Duden, der große, 6, Aussprachewörterbuch, 1962
 von Essen, O. : Allgemeine und angewandte Phonetik, Berlin 31936
 Grundzüge der hochdeutschen Satzintonation, Rattingen 1964
 Die Silbe – ein phonologischer Begriff, in "Zeitschrift für Phonetik" Jg. 5, 1951
 Über den Begriff der Silbe, in "Wiss. Z. der Humboldt-Universität", 1955/56
 Forchhammer, J. : Die Grundlage der Phonetik, Heidelberg 1924
 Hartmann, E. : Bestehen Unterschiede zwischen der Affrikata /ts/ und der Lautfolge t+s ?, in "Z. f. Phonetik", Jg. 17 1964
 服部四郎 : 音声学, 東京 131963
 Hockett, Ch. : A Manual of Phonology, Baltimore 1955
 Jakobsen/Halle : Grundlage der Sprache, Berlin 1960, deutsche Übersetzung der Originaledition von 1956
 Leopold, W. F. : German ch, in "Readings in Linguistics"
 Malmberg, B. : Phonetics, New York 1963
 Martens, C. & P. : Phonetik der deutschen Sprache, München 1961
 Martinet, A. : Phonology as functional phonetics, Oxford 1955
 Mater, E. : Rückläufiges Wörterbuch, Leipzig 1965
 Morciniec, N. : Zur phonologischen Wertung der deutschen Affrikaten und Diphthonge, in "Z. f. Phonetik" Jg. 11, 1958
 Moulton, W. G. : Junctures in Modern Standard German, in "Readings in Linguistics"
 Pike, K. L. : Phonemics, Ann Arbor 51956
 Seiler, Hansjakob : Laut und Sinn, zur Struktur der deutschen Einsilbler, in "Lingua" Jg. 11, 1962
 Siebs : Deutsche Hochsprache, Berlin 131961
 塩谷 鏡 : ドイツ語発音の研究, 東京 1959
 田中宏幸 : ドイツ語の子音結合, ドイツ文学 31号所収
 Tanaka, H. : Die Konsonantenverbindungen im Deutschen, in "Muttersprache" 1964
 Trubetzkoy : Anleitung zur phonologischen Beschreibung, Göttingen 21958
 Grundzüge der Phonologie, Göttingen 31962
 Wängler H-H. : Grundriß einer Phonetik des Deutschen, Marburg 1960

Abriß der deutschen Phonologie (Zusammenfassung)

Dieser Abriß wurde auf Grund der Analyse einer Variante der gemäßigten Hochlautung oder etwas erhobenen Umgangslautung verfaßt, wobei die Methodik von TRUBETZKOY, PIKE u.a. berücksichtigt wurde. Ergänzendes Material wurde aus den Werken von DUDEN, v.ESSEN, WÄNGLER u.a. entnommen. Zuerst sind die deutschen Laute phonetisch gesehen, und dabei wurden fremde oder anomale Laute ausgeschlossen. Aus diesen phonetischen Daten ist der Phonembestand des Deutschen nach bestimmten Regeln ermittelt. Das lautet: /a e i o u ö ü, a: e: i: o: u: ö: ü:, ai au oi, ə/ und /p t k b d g f s š x v z j p c m n ŋ l r h/. /j/ habe ich aus der Systematik der Silbentypen als selbständiges Phonem gewertet, obgleich es mit /i/ komplementär verteilt ist. Sonst habe ich drei Diphthonge und zwei Affrikaten pf und ts trotz der Auffassungen von MORCINIEC und HOCKETT als monophonematisch aufgefaßt.

Anschließend wird das Phonemsystem abgehandelt, und dabei wurden besonders die distinktiven Merkmale der Phoneme beobachtet. Jedes Phonem ist hier mit solchen phonologisch relevanten Eigenschaften beschrieben oder "definiert". Dann folgt die Beschreibung über Phonemverteilung oder Verbindungsweise. Was die Konsonantenverbindungen angeht, so habe ich einmal einen Abriß veröffentlicht, deshalb sind hier nur einige allgemeine Bemerkungen und Nachträge eingetragen.

Nächste Paragraphen beziehen sich auf Varianten oder Allophone; alle wichtigen Varianten sind hier, wenn auch sehr knapp, mit Rücksicht auf deren Arten erwähnt. Gelegentlich habe ich auf einige interessante Phonemersetzungen innerhalb des Deutschen, aber auch auf diejenigen von Japanern hingewiesen, um gleichzeitig den japanischen Deutsch-Studierenden praktische Hilfe bringen zu können.

Abschließend wurden nonsegmentale oder suprasegmentale Eigenschaften wie Betonungen, Intonation (Tonhöhebewegung) und Grenzsingale behandelt. Hier habe ich hauptsächlich die Resultate von v.ESSEN 1964 (über Intonation) und diejenigen von MOULTON (über /+/) benutzt, aber über Betonung habe ich nach meiner Beobachtung analysiert, wobei zwei allgemein verbreitete Akzenttypen bestätigt wurden. Sie sind phonologisch(im strengen Sinne)nur zeitweise wichtig, aber sie verstärken die distinktiven Merkmale der segmentalen Phoneme vielfach genug. In diesem Sinne müssen die Betonungen immer berücksichtigt sein. Als nonsegmentale Phoneme möchte ich folgende hinzusetzen: 1. Betonung /'/, 2. Intonation, /→/ progredient, /↑/ interrogativ, /↓/ terminal, 3. Grenzsingal oder Verbindungszeichen /+/>

Dieser Abriß basiert teilweise auf meine Untersuchungen während meines Deutschland-Aufenthaltes als Humboldt-Stipendiat 1964/65.